

高校野球人気はメディアによってつくられた。

～アマチュアスポーツにもかかわらず高校野球雑誌がなぜ多数発売されているのか～

メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科 君島孝規

(指導教員：清水一彦)

夏の風物詩、高校野球。アマチュアスポーツであるにもかかわらず、専門雑誌が5誌も成立するほどの人気である。なぜこれほど高校野球は注目されるのか。そこにはメディアとの深い関係があった。

高校野球の歴史は古く、1915年4月、10代表校が参加して「全国中等学校優勝野球大会」として豊中球場で開催された。長い歴史がある高校野球において、朝日、毎日新聞は大きな役割を担っている。しかし、高校野球は初めから国民的な人気があったわけではない。1914年に運営資金を要請された大阪毎日新聞（大毎＝現毎日新聞大阪本社）と大阪朝日新聞（朝日）両紙の対応は、当初ほぼ同じであっさりと断っている。大毎は「主催している関西中等学校庭球選手権大会が盛況であり、野球まで手が回らない」との理由だった。しかし、当時部数競争をしていた朝日は、毎日の庭球が人気だったこともあり開催を決断した。大会は毎年盛況を呈した。朝日に遅れをとった毎日も9年後に大会を主催。高校野球が全国に知れわたり、巨大2紙に支えられ国民的スポーツへと成長していった。第10回大会からは甲子園球場で開催。広大なスタンドが超満員になり、ダフ屋も横行した。新聞メディアの販促として、新聞社自体が人気を煽ることで高校野球は発展していったのだ。

新たなメディアができると、それらのメディアはすでに人気のあるコンテンツをもとめた。

1925年にラジオ放送がはじまって3年後の1928年、第5回大会の熱戦の様相がはじめてJOKB(NHK大阪放送局)の電波に乗った。1953年NHKがテレビ放送をはじめると、はやくも翌年には第26回大会1954(昭和29)年が放映された。新聞と電波は相乗効果をもたらした。

その後も、高校野球の人気は高まる一方で、新聞、ラジオ、テレビの画一的な情報では飽き足りないファンのために、現在では『ホームラン』『報知高校野球』『野球太郎』『輝け甲子園の星』『増刊号甲子園』の5雑誌が刊行され、それぞれにマニアックなコンテンツを提供している。しかし、ほかの高校アマチュアスポーツを専門にとりあげる雑誌はほとんどない。サッカーでさえ不定期発行の『高校サッカーダイジェスト』と冬の選手権前に年1回発行される『報知高校サッカー』があるだけだ。

高校野球とほかの高校スポーツに圧倒的な違いはない。「汗と涙の甲子園」との言葉もあるが、それは高校野球に限ったことではない。どんな高校スポーツでも汗と涙は存在する。大きな違いはメディアとの歴史的な結びつだ。新聞という巨大メディアが競って大会を主催し、情報を発信。全国的な人気に火がつき人気コンテンツとなり、ラジオ、テレビでもその黎明期から放送される。現在でも高い注目度と人気があるのはメディアによるところがおおきいといえよう。高校野球の雑誌が数多く存在しているのは、このような背景があるのだ。